

# 令和二年の雑事記く若江郡「西堤村」の探求く

足代 健二郎

前号では、「令和元年三題記く(一) 内助淵(ないすけぶち) 大蛇伝説の一件く」と題して、西堤神社境内にある「鱗殿」とそれにもつわる伝説を描いた『内助淵蛇退治古図』を紹介したが、その本社である「西堤神社」、地元である「西堤村」についてはほとんど触れていない。従って本稿は、その部分を補完するという意味では、その続編である。

本年度前期(五月以来九月まで)に得た知見をメモしたものであるが、内容が雑駁であり、研究が不十分なので、タイトルを(雑事記)とした。

## 一 西堤村のあらまし

東大阪市西堤(旧・河内国若江郡西堤村)は、市を東西に横断する【中央大通り】と【暗越奈良街道(現・産業道路)】の二本の幹線道路に挟まれた中間に位置している。

中央大通りの北側は「川俣」であり、暗越奈良街道の南方には大阪商業大学の所在地「御厨栄町」や「近鉄・河内小阪駅」がある。

西側は、【長瀬川】をへだてて「高井田」に接し、東南は「御厨」に隣接、東側は【第二寝屋川】(旧・楠根川にほぼ同じ)をへだてて「長田」に接している。

今から三〇〇余年まえ、大和川が堺方面に流路を變える以前、鴻池新田(駅名)一帯は、内助淵という大きな池であった。内助淵はのちに新開池とよばれるようになり、宝永元年(一七〇四)以降、それが更に埋め立てられて鴻池新田となった。

西堤村はもともと、この内助淵の西側の堤防付近にあったとされている。旧地はいまの徳庵辺りかと推測される。

今を去る約四五〇年前の天正二年(一五七四)、旧地の村民は、度重なる水難を避けるため、「川俣村」の領



(→図は明治初期の西堤村絵図。黒い部分が川俣、白い部分が西堤の領分。石津家蔵)

内である現在の地に移住した。そのため、西堤村のエリアは、川俣村の土地がモザイク状に入組んだ「錯雑地」となっている。当初、西堤は「川俣村の枝郷」とされ、石高は本郷の川俣と一体であったが、明暦二年(一六五六)、高分けが行われ、(川俣村)七〇〇石・(西堤村)四一四石となった。(『布施市史』などによる)

なお、ほぼ同時期に内助淵付近から他の地域に移住したのは、下小阪・西岩田・小箕輪・安田(鶴見区)・永田(城東区)・地下鉄中央線「深江橋駅」の西北三〇〇メートル・西堤の計六ヶ村である。との伝承が記録されている。(明治三十三年『境内編入願』(上地森林 神社境内編入願)、石津家蔵)【上地(上知)森林】の説明は今ここでは省略しておく】

この文書によれば、「西堤神社は、天正以後西堤村外五ヶ村の郷社たり。神事の際には当村まで神事式行列し来れり、其後数十年を経て、各部落に遥拝所を設け、宮地と称し、代々を経て遂に各自随意に神社と称するに至れりと聞き伝ふ。なかならずく下小阪の如きは、享保年間の頃までは、神事の際、当西堤神社まで神事行列(一名宮入と称す)に來たりたる兆あり」となっている。

確かに、下小阪(近鉄「八戸ノ里」駅付近)の大地主・山澤家の文書によれば、天正二十年豊臣秀吉は、荒地であったこの地の開発権を「西堤村」年寄百姓中に与えている。

司馬遼太郎は『近所の記』というエッセイの中で友人の山沢分家氏から聞いた話として、「八戸ノ里」の地名の由来について触れている。

「入植したのは、七軒だった。やっけてきけると、この土地にもとから住んでいる人がいて、あわせて八戸だから八戸ノ里というふうにいわれた」

そして、この地にもとから住んでいたのは、肌勢（はだせ）喜右衛門という人物で、この家だけが、入植者七軒が真宗門徒であるのに対し、宗旨は真言宗である。・・・などの興味深い話が綴られている。

西堤の旧家・石津家の家譜によると、この肌勢家は同家から分れた親戚であるという。

〈令和二年五月三日〉西堤在住で地域史の研究者であった故・浜田昇子さんの遺族から、遺品の処分をしたい、とのお電話を頂きお宅に伺った。私と故人とは直接の面識はなく、ただ以前、故人が書き残された研究ノートなどはないだろうか、とお尋ねにあがったことがあっただけである。そこで、遺族の方が、引越越しにあたって、私の名刺を頼りに、連絡を下さったのである。（浜田さんのことは、前号P 64で述べた）

そこでその日頂いた主なものは、西堤村の庄屋の子孫で画家でもあった故・石津巖氏が描かれて浜田女士に贈られたという「西堤神社境内」の油絵（**図版左**）、もう一つは石津家所蔵の西堤村古文書三十二点のコピー、枚数にして七十八枚であった。

〈同月十日〉古文書コピーを整理して一覧表を作成。前述の「境内編入願」などの石津家文書は、浜田さん提供のコピーによるものである。



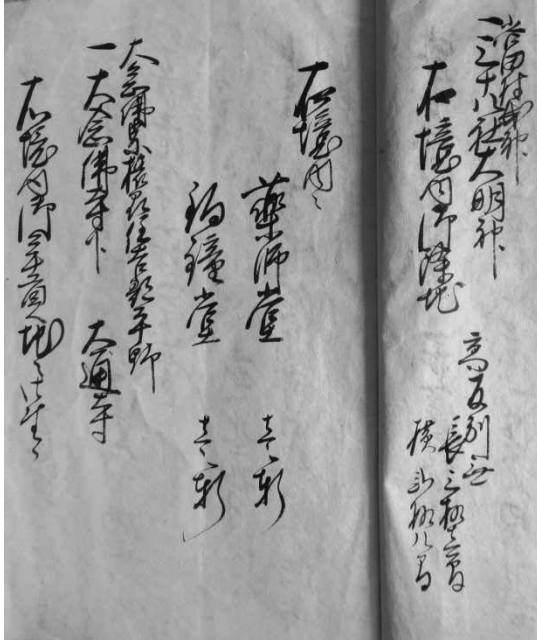
〈十七日〜十九日、二十三日〉下小阪・西岩田・安田・永田・古箕輪の各村を探訪。各村の神社については次章で述べる。

## 二 西堤神社（旧称・三十八社大明神）



当社のご祭神は「天照皇大神・豊受大神」、すなわち伊勢神宮（内宮・外宮）の二神である。明治四年（一八七二）に神宮から分霊を頂いたという。

それ以前の当社は神仏混交の神社で、祭神は「三十八社大明神」、境内に「龍王山寿宝寺」という真言宗の仏寺があった。この寺は、天満東寺町の宝珠院の末寺であり、薬師堂・十六羅漢堂・釣鐘堂を備えていた。



→「当村氏神三十八社大明神 右境内薬師堂・釣鐘堂」の記載がある（「御廻村ニ附書上帳」天保十一年）

なお、〈三重塔有り〉（「東大阪地域の神社調査」東大阪民俗研究会・一九七七）〈五重塔などがあり〉（「大阪府神社名鑑」一九七一）とも述べられているが、三重塔や五重塔・十六羅漢堂の存否は筆者には分らない。

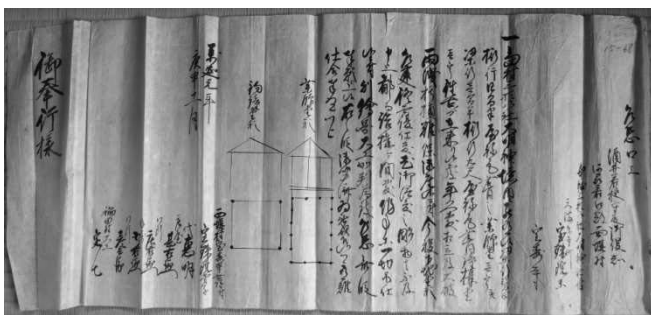
〔**上掲文書**（天保十一年〱一八四〇）石津家蔵）によつて、氏神境内は除地（〱免租地）、31間×28間〱八六八坪。一方、同村内にある「大通寺」は御年貢地（〱租税地）であったことが分かる）

前章で引用した『境内編入願（明治三十三年）』では、当社の祭神は村が旧地にあつた時から、伊勢両宮の祭神と同じであり、現社地はその当時から「御渡り所」としてこの場所に存在した、と記述しているが、これは恐らく事実ではない。

明治元年以降、神仏判然（分離）令の施行に際し、当村としてはこれに従わざるを得なかったであろうし、役所への村度もあつたかも知れない。

寿宝寺の什物はすべて、同村・融通念仏宗の「大通寺」に移管し、祭神も伊勢神宮の分霊に変更した。

〔**図版下**〕氏神三十八社大明神社僧「宝寿寺」より奉行所に提出した「乍恐口上」。境内にある薬師堂・釣鐘堂の修復許可願い。萬延元年〱一八六〇、石津家蔵）。



では、当社の本来の祭神である「三十八社（三十八所）明神」とは、一体どのような神なのであろうか。

その根元社（分霊される元の神社）はかつて吉野（金峰山）に祀られていた神で、蔵王権現の眷属（鎮守社）の一つであったが、廃絶して今は存在しないようだ。

吉野の神々とはおおよそどのようなものであるのかについては、次の解説が分り易いであろう。「金峰山信仰と吉野曼荼羅」（鈴木昭英・一九六八）によれば、

「吉野蔵王堂より山上ヶ岳に至る参詣路には①勝神明神（山口神社）・②子守明神（水分神社）・③金精明神（金峰神社）の三社があり、吉野蔵王堂境内に④天王・⑤佐抛社、さらに上に進んで⑥八王子・⑦牛頭天王・⑧三十八所があり、古来「吉野八社明神」と称して尊んできた」という。そして、

『玉置山権現縁起』（神道大系神社編五）によれば、「勝手明神（男神）と子守明神（女神）を父母として生まれた子供に金精明神（太郎）、若宮、三十八所、八大童子の四十八人がいる」という。また同書には、

「三十八所は日本国有勢の大神、上七社・中七社・下七社、大和国所在の大神合せて三十八所の神也。本地は金剛界三十七尊、胎藏界大日、合三十八体也」とも記す。

『金峯山秘密伝』（三十八所本地垂跡ノ事）には、

「三十八所は即ち子守明神所生の若宮の兄弟なり。或いは行者神山に於いて日本国中の三十八所の大神を勧請、悉地（成就）を祈り所願を成して、八幡・賀茂・春日・熊野等光を並べ本誓を同じうし護国の益を共にす。今即ち三十八神合して一所に崇めぬ。本地は即ち千手、垂跡は一身を分つて多身と為る。蔵王は即ち多身を撰して一身と為る」「甚秘の伝に云。千手は即ち四十臂の尊、合掌して即ち能変の本身と為る。余の三十八臂は即ち三十八所の神体也」と説いている。これで

大体の意味は分かったが、ただ、三十八神の具体的神名を明記した文献は見当たらない。

さて、当社は現社名からも、現在の祭神からも、「三十八社明神」の履歴を読み取ることが困難である。

しかし、東大阪市や八尾市には、現実に「三十八社」と称する神社が存在している。それは、

- ① 三十八（みそや）神社 東大阪市西岩田
- ② 三十八（みそや）神社 八尾市福万寺

の二社であるが、ともに現在の祭神は

天照皇大神・八幡大神・春日大神

の三社（三神）である。（八幡大神を、さらに応神天皇・仲哀天皇・神功皇后と三柱に分けて表記すると、祭神数は五柱となるが、三社という構図には変わりはない）

これはどうということかという点、本来の吉野三十八社明神では神仏分離の国家方針に抵触するので、社名の「三」を生かして『伊勢・八幡・春日』の三社のセツトを祭神としたのである。これは、皇室の氏神・武家の氏神・公家（藤原氏）の氏神という三社を並べ、これですべての神社を代表させたものである。

室町時代以降、「三社（さんじや）託宣」といって、

この三神の託宣文（八幡は清浄、天照皇大神は正直、春日は慈悲を尊ぶ、という趣旨の託宣文）を三尊形式にして一幅に書き表したものが広く世間で信仰された。

福万寺の三十八神社の説明板に「三は御祭神三柱を表わし、十八は神々に対する敬語と伝えられている」と記述しているのは、後付けの理屈である。

- ③ 玉祖神社境内末社 八尾市神立  
吉野三十八（さんじゅうはち）神社

というのもあるが、これは神仏分離などの政策にもかかわらず、「吉野大権現」と称して、そのまま本来の祭神を維持している。社寺方の役人の目も境内末社にまでは及ばなかったのであろう。

次に、旧称を持つ神社から拾うと、

- ④ 仲村神社（旧称・仲村三拾八社明神） 東大阪市菱江
- ⑤ 小坂神社（旧称・子守勝手明神 または三拾八社大明神） 東大阪市下小阪

の二社が挙げられる。

先ず④の現在の祭神は、延喜式内・仲村神社という立場なので、旧祭神を捨て、中村連（むらじ）の祖神「興台産霊（こことむすび）命」としている。

また、⑤は明治以前、子守勝手明神と称したので、天水分神・国水分神・受鬘（うけのり）神

の三柱を祭神としている。しかし、三拾八社大明神と称したという記録が残されていることもまた事実である（『布施市史第二巻』宮座・下小阪・P 112<sup>29</sup>所載・肌勢家文書（吉田殿御免許願書之写）。『大阪府の地名Ⅱ』P 985、平凡社・一九八六）し、前述のとおり、三十八社明神は子守勝手明神を父母とする子神であるから、この両者は全然無関係という訳ではない。しかも、この神社の社頭、鳥居の前方に金峰神社という辻堂があるのも偶然ではないだろう。

さて、以上の5例のうち、②③④については、西堤神社との直接的関係が窺えないが、①と⑤の二社に関しては、前述「境内編入願」に記された伝承の正しさを裏付けていると考えるのが妥当であろう。

ただ、内助淵付近から移転したと伝えられる他の三ヶ村、

小箕輪（古箕輪か）・・・八幡神社

安田（＝鶴見区）・・・住吉神社

永田（＝城東区）・・・水神社

のうち、永田の水神社については、イコール水分神社、と考えれば、何らかのつながりがあるかとも思える。（ただし、この水神社は、鳴野の八剣神社に合祀されて今は現地にはない。蓮如上人ゆかりの鳴かずの池・蓮乗寺に隣接していたようである）

古箕輪の八幡神社・安田の住吉神社については、西堤神社との関係を推測することができない。

最後に、三十八社大明神に関しては、河内サークルの旧メンバーであった大西英利氏による、実に優れた先行研究のことを付記して置かねばならない。

A・三十八社（神社）のルーツと分布・・・

『わかくす』一九九六年春季号（通巻二九号）

B・三十八社明神と子守・勝手明神・・・

『河内どんこう』第五十号・一九九六年十月の二編で、是非参看して頂くことをお勧めする。

氏はその後、『あしたづ』第2号に、

・「東大阪市域に遺る 六十六部廻国供養の石造物」を、第5・18・20の各号にそれぞれ大坂相撲に関する詳細な著作を連載されている。（『あしたづ』第22号所載「全掲載著作 執筆者別索引」を参照されたい）

ただ、非常に不思議の感がするのは、A・Bの二論考とも西堤神社の存在を見落とされていることである。

上述の通り、同社は社名・祭神ともすっかり変えてしまっているのので、「三十八社明神」の履歴を読み取るのは困難であるということがこれでよく分かる。

### 三 「宝寿寺」の釣鐘・石塔

真言宗の寺院である「大澤山 龍王院 宝寿寺」と、西堤神社の前身である「三十八社大明神」の創建の経緯は不明であるが、村の旧地である内助淵の西側の堤付近にあったものが、村の移転と同時に現在地に定着したもののようである。

① 西堤神社

及び宝寿寺

② 大通寺

及び大通寺

墓地の旧地。

これらは、

昭和34年、

現在同寺の

住所地である

「西堤楠

町三丁目5

番18号」に

移転した。

③ 旧庄屋・石

津家屋敷。

明治初期に

は、ここに村の郷倉と石津家の倉があり、その倉から米を積んだ舟が、裏の水路を通り、楠根川を経て大坂の堂島へ通ったと言われている。

③の説明文は、『郷土史 楠根川のほとり』（西堤・藤戸郷土愛好会・林義信、一九八三）に拠る。なお、同会は『河内の郷土文化』創刊号に、当サークルセンターの加盟サークルであった履歴が残されている。



この宝寿寺には、もともと、

「河州若江郡西堤邑大澤山龍王院寶壽寺三十八社神祠 銅鐘銘并序・・・上宮皇子開基弘法大師影向之地・・・」

などの銘が刻まれた釣鐘と鐘撞堂があった。

（現住金海僧都越中人・・・三十八神霊・・・享保二・・・四月佛誕生日、天満寺宝珠院七世恵明仁道法印謹銘、住持沙門権大僧都法印祐存、治工大坂心斎橋、伊場勘右工門尉就友、藤原氏なども後考のため一応書き止めておく。石津巖氏筆録）

鐘の寄進者は、石津甚右衛門・西村九右衛門・石井與兵衛・石井庄右衛門。その氏名の上、宗安・宗春・・・

などの15名は供養のための祖先の法名かと思われる。漢文で書き列ねた銘文の間、鐘の四面に蓮華座に乗せた梵字が四つ。

東・阿闍 南・宝生 西・阿弥陀 北・不空成就 (ウーム) (タラク) (キリク) (アク)



これは、中尊の大日如来と併せて「金剛界五仏」というもので、宝篋印塔の四面等にも刻まれているので、これで四方八方、世界全体を表現しているのだろうか？と勝手に想像するが、難しい教義は知らない。

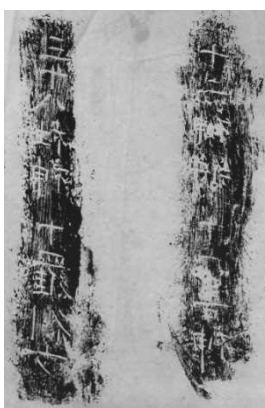
実は、それよりも、私としては、

三十八社神 十羅刹女 十二神将 十六善神 諸行無常

是生滅法

生滅滅已

寂滅為樂

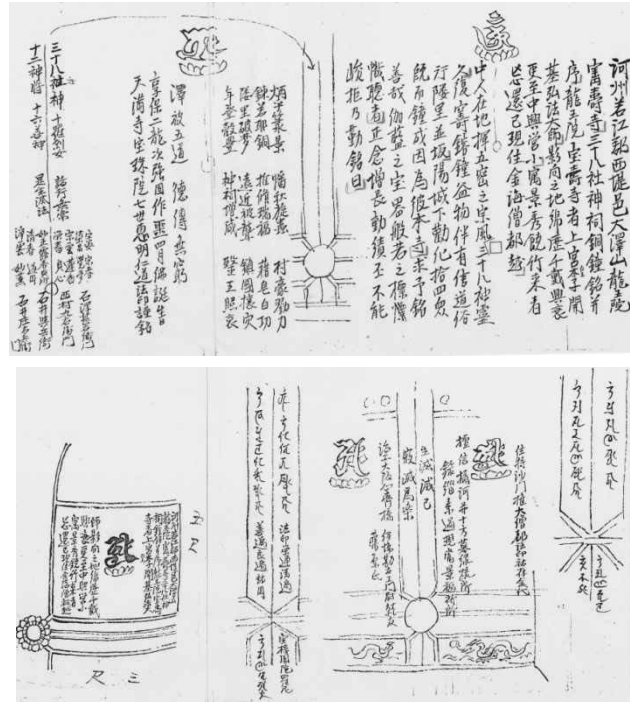


↑釣鐘刻銘の墨塗り拓影（石津巖氏採拓）

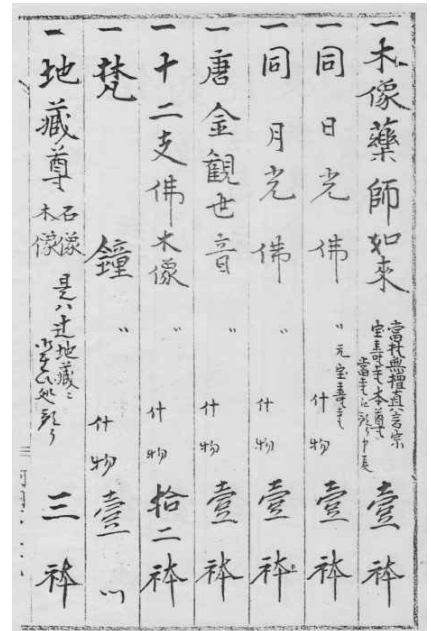
と刻まれた次の神々、

1. 十羅刹女（法華行者の守護神）
2. 十二神将（薬師如来の眷属。また、昼夜十二時の護法神として十二支獣を頭に頂く例が多い）
3. 十六善神（般若経の守護神）

の数字の合計が三十八になる、という点に興味がある。つまり、龍王院宝寿寺としては、これらの諸神を三十八社明神と解釈していたのかも知れない、という意味である。



右の図は、故・石津巖氏（現当主・久左衛門氏のご尊父）が書き写されたもの。五尺・三尺とあるのが、鐘の高さ、直径であるうか。神仏習合の貴重な遺物であったこの釣鐘は、明治以降、大通寺の鐘撞堂で使用されていたが、昭和十七年末、金属供出令によって惜しくも供出されてしまった。



→ 「一木像薬師如来 当村無檀真言宗宝寿寺本尊当寺に預り申候」「一同日光佛、一同月光佛、一唐金観世音、一十二支佛木像」とあるのがその釣鐘である。仏像はいま大通寺の薬師堂に安置されている。  
**（明治五壬申年の大通寺什物明細書（前欠）。石津家蔵）**

← 宝寿寺の住職名を刻んだ古めかしい宝篋印塔が三基。大通寺墓地の一角、大通寺歴代の真新しい墓標の隣りに遺されている。手前は「大澤山寶壽寺 中興金海法印建」「享保七壬寅年（一一七二）」とある。



#### 四 融通念仏宗「大通寺」

前掲『郷土史 楠根川のほとり』P 163 に、  
 ・大念仏と西堤

「西堤村の庄屋石津久左衛門は平野大念仏に帰依し、その後平野大念仏本山管長（四十一世・清雲上人）をつとめ、西堤村および近村の大念仏布教に努めました」  
 ・大通寺の建立

「清雲上人在世の頃、西堤村に大念仏の寺を建立し布教に努めました。その後、延宝5年己（一六七七）6月7日、寺号御改により「圓融山大通寺」と名を改めています。江戸時代末期から明治の初めにかけて、各村の寺は無住の寺が多く、西堤神社内の宝寿寺も例にもれず無住の寺でした。当時の大通寺住職旭海は識見高く教えを乞う人多く、七カ寺の末寺を持つほど西堤村および近隣各村民の信仰を一身に集めていました。西堤村でも明治4年神仏混淆分離の令により、西堤神社内の宝寿寺を大通寺に統合しました。その当時宝寿寺に祀られていた墓は、現在大通寺本堂横に祀られています」と簡潔に述べられていて、実にありがたい（西堤・長田・御厨―3地区の郷土史）入門書である。ただ、当初私には俗人である庄屋石津久左衛門さん（当主3代目。石津巖氏は13代目。現当主の石津久左衛門氏（襲名ではなく本名）は14代目にあたる）が本山管長・清雲上人となったという融通念仏宗の制度上の仕組みが不審に思えたが、『融通念仏宗の六別時について』（大澤研一・大阪歴史博研究紀要第24冊所収・一九九二）などの論考のおかげで少しは分かってきた。とにかく、「西堤村」の歴史は奥が深い。まだまだこれからの研究課題である。（猪飼野探訪会）